



意訳 新十津川砂金地



へるふね (Perupnei)



目次

意訳 「石狩川樺戸郡ソプチ川砂金採取の状況」

明治34年7月 殖民公報第3号

・地理 ソプチ川は樺戸郡新十津川村の西部にあり、当別村界のカムイシリ（1,061m）、ピンネチセネシリ（1,216m）、マツネチセネシリ（980m）の諸山に発する。それらの山は天塩国境の暑寒別岳、クンベツヌプリ等の山脈に連坦し、新十津川村と当別村との分水嶺をなしている。ソプチ川は上流で分かれ、一つはパンケソプチ川、一つはペンケソプチ川と言う。目下盛んに稼業されているのはパンケソプチ川で、上流で更に二派となり、左はマツネチセネシリの南方を源とし、右はカムイシリを源とする。パンケソプチ川はカムイヌプリの北東に発し、ペトウドルンペ山の北方を流れ、東流してパンケソプチ川に合流する。

ソプチ川の川幅は、第1二股より下流は10～20m、それより上流は10～15m、更に上流では3～4mで狭い所は2～3mに過ぎない。上流では、両岸が迫り絶壁となっていてところが多く、流れの屈曲が甚だしい。水深は深いところで4～50cmである。地層は複雑で、川には輝石安山岩、花崗岩等が多いが、砂金採取の状況から考察すれば、含金層は山頂に近い所と思われる。何故かと言えば、上流にある砂金は大きく、下流に従い小さくなるからである。

・運輸交通 滝川停車場から新十津川村に至り、中トップ戸長役場の前を右に折れ、ソプチ川を渡って左に曲り吉沢農場を經由、およそ4kmで二股に至る。砂金着手以来、人の往来によって小路ができたが、断崖絶壁の下は川を数十か所渡るため、荷物の運搬は全て人力による。滝川停車場から第1二股まで15km、第2二股まで20km程である。

・借区数及び借区年月 砂金が発見された時期は詳らかではないが、鉱区は三鉱区で、下方は明治30年4月札幌区南2条西3丁目齒科医後藤頭美の借区で、その譲受人は同区北3条西3丁目白石栄三郎、同区北8条西4丁目伊吹山虎次郎で、着手したのは明治34年6月5日である。その鉱区は本流4km、パンケソプチ川2km、ペンケソプチ川3kmである。上方は明治34年5月の許可で、その延長は2支線合わせて16kmである。借区人は室蘭の長谷川宇之吉で、新十津川村上杉文吉と共同従事し、その着手は6月20日である。

・入場料 下方、上方とも事務所を設けており、その場所は、下方は第1二股の左側、上方は第2二股の左側である。1ヶ月の入場料は男1人6円で半期を3円としている。男15歳以下及び女は半額で、途中病氣負傷等のために従事できなかった時は日割りで清算する。

・採取器 砂金採取に用いる器具は、藁ネコ、カッチャ、ヨセ板、ツルハシ、カナテコ、バケツ等で、大規模に行う場合でも、長さ2～3mの樋を使用するに過ぎない。

・採取人 下方の鉱区は、6月5日の開鉱後月末までの入場者が230人で、7月1日から4日まで100人である。延長8kmの諸所で採取する。上方は6月20日の着手で月末までに250人、7月1日から4日まで350人に及んだ。更に、毎日6～70人の入場者があり、延長6kmの間、ほとんど隙間が無い程である。上方に多数入り込むのは、既に4～50人の密採者が入っていた事、6月21日頃7人が10日間で200匁以上採取した事、砂金粒が下方に比べて大きい事等による。採取人は、滝川、砂川地方からの農民、諸職工が多く、最近は旭川地方から盛んに入り込んでいる。旭川地方は師団の工事が大きく減り、人夫その他職を得る事ができなかった者が、一攫千金を期して来訪するからである。作業は大抵4人1組で行うが、多いときは10人以上の場合もあり、2～3人で従事することもある。一般に経験の無い者が多く、北見枝幸から来た者によれば、当川の採取は比較的容易で、採集方法が良ければ、素人でも1日1円分を採取することができる。しかし、経験の無い者は、下盤等、砂金のあるところまで掘削できず、成果無く下山する者もあると言う。

・砂金産出期の予想 目下の様に、採取人多数のときは、上方の鉱区等はたちまち取り尽くし、上下両方を合わせても本年中に採取する場所が無くなってしまいうだろう。しかし、当川砂金産出のため、樺戸郡全域、浜益、増毛、当別地方の諸川に至るまで探見され、既に借区許可になった場所もある。このため、本年末から来年に至るまで、この地方では砂金熱が高騰するだろう。

・砂金地の物価 採取人は通常、1週間から10日分の食料を持って入場するが、それ以上滞在する者は現地で購入するしかない。現在、小売商人は3軒で、白米1升25銭、酒1升55銭、麦酒30銭、味噌1貫目55銭、砂糖1斤20銭、煙草30目15銭、草履1足5銭である。運賃は滝川から米1俵2円を要する。

・衛生 採取人は砂金のため一時的に入場する者なので、準備が万全ではなく、諸所にテントを張って雨露を凌ぐ者はあるがその数は多くない。未だ立木の払い下げ許可が下りないので、フキの葉やクマザサ等を用い、立木の皮を剥いで屋根とする者もあるがほとんど野宿に等しい。採取人は終日水中で作業するので、自然に湿気を受け、脚気患者が続出するのではないかと心配する。

・取締り法 鉱区主は事務員3～4名を配置しているが、採取人が多数入場するため、取

締りが十分ではない。幸い今は農民が多いので、紛争の声を聞かないが、今後更に多くが入場するのであれば、適切な取締りが必要ではないか。

意訳 「石狩国新十津川砂金地調査報文」農商務省技師 小林儀一郎
大正元年8月21日 鉱物調査報告（北海道之部）第11号

・沿革 新十津川砂金地は、石狩国樺戸郡徳富川支流総富地川流域で、新十津川町の西方8 kmにある。この砂金地で初めて採取に着手したのは明治33年の頃で、36年までの3年間はその最盛期で、採取人2千名、日産平均5 kgを産出したという。37年以降は衰勢になり、39年には採取人3百人に満たず、現在では僅かに40人を数えるに過ぎない。産金額は過去に比べるべくもなく、月産1 kgにも及ばない。

・地質 この地域は2百～6百mの山岳で、地質は古生層で構成されている。岩石は千枚岩質粘板岩を主とし、輝緑凝灰岩、粘板岩、珪岩等である。千枚岩質粘板岩は暗黒色の薄片状に剥離しやすい粘板岩であり、総富地川の上流に広く分布している。輝緑凝灰岩は粘板岩の下に位置し淡緑色堅硬で、総富地川中流に露出している。珪岩は藍灰色の岩層で総富地川中流にあり、薄い粘板岩を伴う。層向きは上流方向で東西、中流では南北に向き、傾斜は50度を超えるものが多い。

・砂金 砂金はこれらの区域を通じ、河床及び兩岸の砂礫より採集される。そして、千枚岩質粘板岩が河床である部分に最も豊富である。総富地川はこれら岩層を流走するため、各地層の層理や裂罅中に金粒が留まりやすい。そして千枚岩質粘板岩は剥離性があるため、金粒が留まるのに適当である。

総富地川北側を流れる通称「右の沢」は砂金を産しないと云う。しかし、構成する岩層は本流と同様で、輝緑凝灰岩が比較的広く発達する。ただ、流れの方向と地層の向きが並行で、本流に比べ急流であるため、金粒を留めることが少なく、砂金の存在を疑われたのではないか。

金粒は他の砂金地と同じく、いわゆるバラスと称する礫層中にあるが、特にバラスと基盤とが接触する部分に多い。千枚岩質粘板岩で構成される箇所ではバラスを淘汰すると共に、その基盤の粘板岩を層理に沿って良く洗浄し、その間に留まる金粒を採取する。金質は良好でほとんど純金であるが、下流で産するものは少量の銀を交え、やや白色を帯びるといふ。

総富地川上流は現在の稼業地であり、採取人は30余名、神谷伝兵衛の所有に属する。下流に山本某の稼業地があるが現在は休業している。神谷出張所で調査すると月産平均1 kgを超えず、下流の採金を合わせても月産1 kgを超える程度である。この砂金地は既

に全盛期を過ぎ、総富地川本流に沿う主要部は取り尽くした感があり、将来再び隆盛になる事は難しいが、千枚岩質粘板岩地域にあって、その層向きと交差する多くの小支流は、稼業すれば多少の採金があると思われる。

意識 新十津川砂金地

著 へるふね

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
